

主 題：教会のあるべき姿 : 成長8  
聖書箇所：エペソ人への手紙 4章14-16節

皆さん、このシリーズもいよいよ終わりが近づいて来ました。「教会のあるべき姿」というシリーズを始めてもう約2ヶ月が経ちました。今日と来週の2回で残りを学んでいきたいと、そのつもりで用意していましたが、昨日最後に自分の原稿をまとめていて気付きました。あと2回で14節から16節を見るのは無理だなあーと。ですから、あと3回かけてパウロが教えてくれているみことばの真理をじっくりとごいっしょに見ていきたいと思えます。

皆さん、これまでのことを振り返ってみてどうでしたか？教会とはそもそもいったい何なのか？私たちが同じ神の家族として生きていくとはどういうことなのか？どうすれば神に喜ばれる教会として成長し続けていくことができるのか？私たち一人ひとりの信仰生活にとってとても重要な内容についてこれまでいろいろと考えて来ましたが、その理解を深めることができたでしょうか？このシリーズを始めるときに私は皆さんにこのように言いました。「今、私たちの教会は新しい体制へと移り変わろうとしている、そんな過渡期にあります。」と。そして、「教会が益々成長していくときに大切になるのは、私たちが思い思いに好きなように考えて行動することではなく、聖書が教える教会のあるべき姿に立ち続けることです。」と。

もう何度も繰り返して言っていることですが、様々な違いを持っている私たちが、それぞれの価値観や思いに基づいて各々自分勝手な目標を目指して歩んでいるなら、そんな教会には絶対に一致は見られません。表面上はたとえ今、何も問題がないかのように見えたとしても、必ずいつかバラバラに分裂してしまうのです。だからこそ、私たちは こうして何回も時間を取って、私たちが同じ土台に立って、キリストが持っておられる主の設計図に基づいて教会を建て上げていくこと、その必要性を見て来たのです。どうでしょう？この主が持っておられる教会の設計図について少しずつでも正しく理解することができているでしょうか？

先週、私たちが学んだこともまさにそのことでした。覚えておられると思いますが、私たちは取扱説明書について考えたわけです。多くの人にとって複雑で読むことすら面倒だと感じてしまうそんな取扱説明書でも、私たちが何かを作ろうとするならそれは必要不可欠なものです。この説明書を見れば自分が買ったものを作るためにどんな道具や材料が箱の中に入っているのかということも確認できるし、その材料をどのような手順で組み合わせていくべきなのか、そのことも知ることができます。また、何よりも自分が作っているものが完成すれば、いったいどんな形になるのかということも説明書は教えてくれるわけです。

そして、これはキリストが教会を建て上げるために持っておられたその取扱説明書についても同じように言うことができました。私たちがその説明書を開いてみると、そこにはまず教会を建て上げていくのに必要な道具や材料が記されていました。皆さん、私たちにはどんなものが与えられていましたか？主は教会を建て上げていくことができるように恵みによって私たち一人ひとりに賜物を与えてくださっていたのです。私たちにはそれぞれ主から与えられた特別な働きがあるということ、そのことも見ました。でも、そうして主から与えられた働きは私たちが自分勝手な方法で為して良いものではありませんでした。だからこそ、私たちひとり一人がしっかりとみことばに沿って働きを為していくことが出来るように、私たちを整える霊的リーダーたちが与えられていたのです。

そして、それらが組み合わされて忠実に働いていくことでどうなるのでしたか？キリストのからだである教会が建て上げられていくのです。でも、これで主の取扱説明書はすべてではありませんでした。そこには材料や組み立てる手順が記されていただけでなく、最終的に到達するその完成図についても記されていたのです。私たちが教会を建て上げていくなら教会はいずれこんな姿へと変わっていくとい

うそのゴールも主は示してくださっていました。それが前回見た13節で言われていたことでした。皆さん、成長した教会にはどのような姿が見られるようになるかと教えていたでしょう？特に、三つのことを見ました。まず、一つ目に「成長した教会には一致が見られる」ということでした。私たちが同じみことばの真理、同じ福音を信じて、同じキリストを心から愛して、ともに教会を建て上げていこうとするなら、そこには完全な一致が見られるようになるということでした。

また、二つ目に「成長した教会には信仰の成熟が見られる」ということも見ました。私たちが子どものままでいるのではなく、みことばを学んでそのみことばに従っていこうとするなら、そこには信仰の成熟が現れるようになるということでした。そして、最後三つ目に「成長した教会にはキリストの姿が見られるようになる」ということでした。私たちが同じみことばに、みことばの真理や福音を信じてみことばに従ってキリストに似た成熟した者へと変わっていくなら、そんな教会にはキリストの性質を持った人たちが溢れるようになります。そして、その結果として、そこにはまさにキリストの姿が見られるようになるのです。これがキリストの持つておられた教会の完成図であり、私たちみなが目指していくべき究極的な目標でした。この完成形の姿が教会のうちに現れるようになるまで、私たちは与えられた様々な働きを忠実に為していくことが必要になります。

さて、こうして私たちが目指していくべき最終的なゴールを提示してくれたパウロは、では、残りの14節から16節のところで、いったい私たちに何を教えてくれているのでしょうか？簡潔に言うなら、こういうことです。それはこの究極的な目標を目指している私たちひとり一人がその目標を達成するために今何をすべきかということでした。言い換えるなら、まだ到達していない教会の完成形へと近づいていくために、今、私たちが具体的に何をすべきなのか？そのことをパウロが教えてくれているのです。パウロは私たちが目指していくべきその究極的な目標について13節に記し、そして、14節から16節で、では、どうすればその目標に辿り着いていけるのか？到達することができるのか？その過程について詳しい説明を加えてくれています。ですから皆さん、私たちがこの14節から16節に記されている道に沿っていけば、その先に13節のゴールが見えて来るということでした。

これから14節から16節を見ていきますが、これも主のすばらしい計画だと思いませんか？主はご自分の取扱説明書の中に教会を建て上げるのに必要な材料や道具の使い方、また、完成図だけを含めたのではなくて、どうすればその完成形へと到達していくことができるのか？どんな点に私たちは気を付けるべきなのかということについて、さらに詳しい手順や注意点を教えてくれています。説明書を見たときに多分目にされたことがあると思いますが、ここに注意して作ってください、特にこの部分については気を付けてくださいと書かれているものがあります。それは作る上で大切な点です。説明書に書かれている注意点をよく読まずに作って後々後悔したことってありませんか？注意点を無視したらどうなりますか？作り上げようとしているものが完成しないばかりか、それが壊れてしまったりすることもあるわけです。

これは私たちが教会を建て上げようとする時も同じです。たとえ、私たちに必要な材料が揃っていたとしても、完成形を正しく知っていたとしても把握していたとしても、注意すべき点を抑えながら作っていかねば目標には到達しないということでした。では、その注意する点とは何でしょうか？教会の完成へと到達していくために私たちは具体的にどのようなことを実践すべきでしょうか？そのことを14節から16節の中で皆さんと一っしょに考えてみたいと思います。特に、私たちはこの箇所から目標を目指して成長していく教会がその過程において注意すべき五つの点を見ることができます。ゴールを目指して歩んでいる私たちが今実践すべき五つのことです。実際にそれはいったい何かを具体的にみことばから見ていきましょう。今日は五つのうちの一つだけ、14節の中から見たいと思います。14-16節を読みます。

「:14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、:15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。:16 キリストによって、からだ全体

は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

## ☆目標を目指して成長する教会、その過程における五つの注意点

### 1. いつまでも子どものように惑わされないこと 14節

目標を目指して教会が成長していく上で注意すべき一つの点は「いつまでも子どものように惑わされないこと」です。これは私たちが成長を目指していく上で大切なことです。パウロは14節をこのように始めています。「それは、私たちがもはや、子どもではなくて、」と。パウロは前回見た13節の所と対比して読者たちに言うのです。「皆さん、私たちの目指していくべきところは成熟した完全なおとなになっていくことです。だから、いつまでも子どものままであってはいけません。」と。

ここで「子ども」と訳されていることばは、生まれたばかりの赤ん坊から思春期の子どもに至るまでの幅広い子どもの姿を表したことばです。まだ完全におとなになりきっていないそんな未熟な子どものことを表しています。また、このことばは同時に、そのような身体的な年齢だけのことを指しているのではなく、その幼い子どもたちが持っている特徴、内面の幼さ未熟さというものも表しています。つまり、ここでパウロが言いたかったことは、兄弟姉妹たちが身体的にいつまでも子どものままでいてはならないということではなくて、彼らが霊的に未熟なままでいてはいけないということです。そのことを教えているのです。いつまでもその霊的な部分が子どものままで未熟なままでいてはいけないと。

少し注目してほしいところがあります。それはパウロがここで「あなたがたがもはや、子どもではなく」とは言わずに「私たちがもはや、子どもではなくて、」と言っていることです。これはどういうことでしょうか？あれほど成熟して素晴らしい信仰生活を送っていたパウロでさえも、かつては子どもの時があったということです。パウロも他のクリスチャンと何ら変わらない信仰の成長をいつも目指して生きる者でした。だから、パウロは自分自身もこの中に含めたのです。そのことを考えた上で言えることは、パウロを含めてすべてのクリスチャンは、信仰生活を始める時は赤ん坊として始めるということです。言い換えるなら、私たちのうちにはだれひとりとして救われた瞬間から霊的に成熟したおとなとして生まれて来るものはいないということです。皆さん、肉体的にどんな年齢の人であっても、私たちが救われた時はみな赤ん坊からスタートするということです。

思い返してみると、確かにご自分の許を訪ねてきたニコデモに対してイエスはこのように言われました。ヨハネ3：3「イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と。逆に言うなら、本当に救われている人たちはみな例外なく新しく生まれ変わった者だ、新しく生まれ変わって赤ん坊として歩みを始めた者だということです。もう何度も聞いていることですが、よく考えてください。クリスチャン生活というのは主を知る以前の生活にキリストを付け加えたものではないということです。キリストを受け入れた者はこれまでとは異なる全く新しい歩みを始めていくのです。新しく造り変えられた者は、これまでにない新しい目標、新しい望みを持って生きる者に主が変えてくださったのです。

だからこそ、ペテロもこのように言っています。Iペテロ1：23「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。」、あなたがたは新しく生まれたのだということを伝えた後、続きの2：2で「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と言っています。救われたばかりの者は確かにみな例外なく「霊的な赤ちゃん」です。しかし、新しく生まれた者はいつまでもその状態にいるのではなく成長していきたいという思いを持っています。だからこそ、みことばの乳を慕い求めるのです。赤ん坊が子どもに子どもがおとなへと成長していくように、自分に必要なものを求めるのです。そして、そのような願いを持っているからこそ子どもがおとなへと変わっていくように、みことばの乳によって少しずつ霊的な赤ん坊から成熟したおとなへと変わっていくのです。

このことは普通に考えるならある意味当たり前のことと思えます。もし、赤ん坊が自分にとって必要な乳を求めることを止めるなら、その子には何らかの問題が起きていることにすぐ気づきます。また、

赤ん坊が子どもがそのままずっとその状態で居続けるなら、かわいいかもしれませんが、それはおかしなことです。それと同じように、パウロは新しく生まれた者たちがいつまでも子どものままでいるのではなくておとなになっていくことを求めていました。そして、それがすべてのクリスチャンに求められている責任であるからこそ、成長しない者に対してみことばは厳しいことばを告げています。成長していない者にパウロはこのようにことばを投げかけていました。コリントの兄弟たちに対して I コリント 3 : 1-2 「:1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御霊に属する人に対するようには話すことができないで、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように話しました。:2 私はあなたがたには乳を与えて、堅い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。」と。

コリントの兄弟たちはいつまで経っても赤ん坊のように乳を必要とするような者だったのです。成長していなかったのです。霊的な幼児でした。そのことを考えると、なぜこの教会には様々なところで問題が起きていたのかが分かります。みなが幼児であったから、未熟な彼らであったから、その幼さが原因で教会の様々なところで問題が起きていたのです。パウロはそんな彼らの状態を決して良しとはしていませんでした。だから、こうして私たちがみことばを見たときに言えることは、救われたすべての人たちは赤ん坊として信仰生活を始めるということ、そして、その未熟なままでいるのではなく成長していくことが神の持つておられる計画だということです。ずっと子どものままでいるなら、まるで、コリントの教会のように様々な問題を引き起こすようになる、成長していきなさいとパウロは教えます。

皆さん、ちょっと考えてください。いったい、どうして子どもで居続けることが問題になるのでしょうか？どうしていつまでも成長しないことが大きな問題となるのでしょうか？少し触れましたが、それは成熟していない子ども、霊的に未熟なクリスチャンたちは次に挙げるように少なくとも二つの特徴を持っているからです。残念ながら、日本語の聖書では少し分かりにくいのですが、実は、この箇所の原文を見ると「私たちがもはや、子どもではなくて、」と言ったそのすぐ後に二つのことばが続いています。「波にもてあそばれたり」と「教えの風に吹き回されたり」ということばです。ですから、パウロが言っていること、私たちがもはや子どもではなく、「波にもてあそばれたり、教えの風に吹き回されたり」という特徴を考えるほどに、なぜ子どもでいることが問題なのかがよく分かります。

### ○未熟な子どもが持っている二つの特徴

a) 不安定な存在 : 子どもというのは不安定な存在だ、不安定さを持った存在だということです。ここに書かれている「波にもてあそばれたり」ということばは嵐に遭って船が波によって大きく揺れている様子、波にもまれていたそんな様子を表しています。何となく想像できます。恐らく、このことばの様子が皆さんにとっても一番分かり易いのは、イエスと弟子たちがあのガリラヤ湖で舟に乗っていた時のことではないかと思えます。ある日、イエスとともに弟子たちは対岸へ渡ろうとして舟に乗っていました。そこで嵐に遭遇するのです。彼らの中にはかつて漁師であった人もいました。ということは、彼らほど嵐の中で舟をどのように扱うのかということに長けている者はいなかったのです。百戦錬磨の漁師たちでした。でも、そんな彼らにとってさえ余りにも激しい嵐であったため、舟を安定させることができずに今にも死にそうになりながらイエスに助けを求めたのです。その様子がルカ 8 : 23、24 にこのように記されています。「23 舟で渡っている間にイエスはぐっすり眠ってしまわれた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった。:24 そこで、彼らは近寄って行ってイエスを起こし、「先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです」と言った。イエスは、起き上がって、風と荒波とをしっかりとらせた。すると風も波も収まり、なぎになった。」と。ここにある「荒波」ということばがエペソ書で使われている「波にもてあそばれたり」の名詞形です。

皆さん、この様子を思い浮かべるなら想像できますね。荒波にもまれていた舟は非常に不安定なわけです。また、このエペソ書を記したときのパウロ自身もこのことを経験していました。舟が荒波にもまれることがどのようなことかが分かっていたのです。パウロはこのエペソ人への手紙をローマの獄中で執筆するのですが、ローマに連れて来られるときに彼自身もひどい嵐に遭っていました。そのことは使徒の働き 27 章に書かれていますから、読んでいただければよく分かります。彼は 14 日間、船の上で

激しい波に揺られていました。嵐が余りにも酷いものだったから人々は船を何とか軽くするために積み荷や船具さえも捨てなければならなかったのです。乗組員たちは食事をすることもできないほどの激しい嵐でしたから、助かる望みなどほとんどないほどの深刻な状況に彼らは追い込まれていたのです。それほどまでに激しい嵐をパウロは経験していたのです。そして、そのことを経験したパウロが霊的に未熟なクリスチャンたちを指して描写するために用いたのが、この波にもまれ、もてあそばれている状況だったのです。霊的な幼児とは、まるで嵐の中で波にもてあそばれている、波にもまれている船のように、いろいろなものに揺れ動かされてしまうそんな不安定な存在だと言ったのです。

私たちが子どもという存在を考えると彼らはまさにそんな姿です。前回も少し見ましたが、子どもは周りの状況や自分の感情といったものにすぐ左右されてしまいます。自分の欲しいものがあれば何があってもそれを手に入れようとするし、手に入らなければ彼らは不機嫌になったり怒ってしまったりします。我慢することができずに感情をすぐに表に出してしまいます。未熟な子どもはいつもそんな不安定さを抱えています。でも、これと同じように、未熟なクリスチャンたちもいろいろなものに左右されて心が揺れ動かされてしまっているとパウロは言ったのです。

未熟であるなら私たちはどんなものに心が揺れ動かされたりしますか？今もそうかもしれませんが、例えば、状況によって揺れ動かされたりすることがあります。自分の生活が思い通りにいっている時や問題が起こったとしてもそれに対して心構えをしている時は、みことばに心を留めていることができますが、自分の想像をはるかに超えるようなことが起こったとき、手に負えないことが起こったときにはどうなりますか？また、問題が予期しないときに起こったとき、自分が思い描いてもないようなときに何かが起こったときにはどうなりますか？心が状況に左右されて平安を失ったり、みことばを忘れてしまったりすることがあるわけです。

また、私たちは状況によって左右されるだけでなく、感情によっても左右されることがあります。自分の好きな人には愛を示すが、自分の苦手な人に対しては愛を示しませんとか、こんな酷いことを相手がして来たのであれば自分からは許すことなんてできないと。そのような振る舞いをしてしまうことがあったりします。また、皆さんはこんな経験はありませんか？あるときにみことばを学んで主に対して心の中で燃え上がるような情熱を持って「神さま、感謝します。賛美します。」とそのような思いをもって、次の日にはまるでそれがどこかにいってしまったかのように消えてしまうと感じたりすることがあったりします。そんなときはどうしますか？もし、私たちがみことばに心を支配させるのではなく、状況や感情といったものに心を支配させることを良しとするなら、いろいろなものに対して不安や恐れを抱いたり、みことばに対して疑いを持ってしまうことにつながったりすることもあります。

また、感情に支配させてしまうなら、自分の望み通りの時や感情が高ぶっているときは主に従うが、そうではないときは従わないというような不安定な態度になってしまうのです。私たちはこういった感情や状況といったものにも確かに心動かされることはあります。けれども、同時に、罪の誘惑というものに対しても心が揺らいでしまうことがありますね。私たちの周りにはたくさんの誘惑があります。みことばを心に蓄えていつも主に目を向けて歩んでいこうとしているときに、本来見るべきでないもの、本来聞くべきでないものに目を留めてしまって、主を喜ばせるものではないものに心が奪われてしまったとするなら、主から離れて罪を犯してしまうことがあります。

皆さん、成熟していない子どもはそんな不安定さを持っているということです。そして、その不安定さのゆえに様々な問題を引き起こしていきます。だからこそ、パウロは成長を目指す私たちがこんな子どものままでいてはいけないと彼らに教えを与えたのです。皆さん、私たちの歩みを振り返ってみてどうでしょうか？確かに、救われた当初はみな霊的な赤ちゃんであったゆえに、いろんなことを知らなかったゆえに、いろいろなものに心が揺れ動かされてきました。感情や状況、また、罪の誘惑というものに対して大きな波にもまれて安定しなかったことがたくさんあったと思います。でも、その状態と今とを比べてみてどうでしょうか？もちろん、完璧にできるものではありませんが、少しずつであっても、かつてより成長した姿、安定した歩みを私たちはしているのでしょうか？それとも、いつまで経っても不安定な子どものままでいるのでしょうか？

**b) だまされやすい存在** : 未熟な子どもは不安定なだけでなく、だまされやすい存在だということです。ここで「**教えの風に吹き回され**」と訳されていることばは、原文ではこのことばの前に「**あらゆる、どんな**」ということばが用いられています。それで、もし皆さんの聖書にこのことばがないなら、書き足しておいてください。子どもというのは「**あらゆる教えの風に吹き回されてしまう**」ということです。要するに、いろいろな教えに惑わされて間違っただけで方向へとすぐに引っ張られてしまう、そのような存在だということです。13節で見ましたが、私たちは本来みな成長して信仰と神の御子に関する知識において一致を目指していく者になっていかなければいけないにも関わらず、未熟な者はあらゆる方向から吹いてくる偽りの風、偽りの教えに惑わされだまされてその目標に進んでいけないのです。まっすぐ進んでいかなければいけないのに、いろいろなものにだまされ欺かれ、いろいろなものに心が捕らわれてまっすぐ進んでいけないのです。

皆さん、これが未熟な者の特徴だとするならば、そんな人たちが教会の中に居続けたら教会の成長にとっては大きな問題になりますね。ここで少し考えてみてください。いったい、どうして子どもはいろいろなものに惑わされ易いのでしょうか？どうして間違っただけで教えに引っ掛けられてしまうのでしょうか？どうしてだと思いませんか？このことに関して、ロイド・ジョーンズ師はいくつかの面白い考察を上げています。この問いに対する答えを彼はこう述べるのです。まず、**(1) 子どもは無知だから** : 知識がないから基準がない、基準がなければ物事の吟味、評価ができない、吟味しないということは判断できないということになると言うのです。知らないことが多すぎるのです。私たちが子どもであったときを考えるならば、まさにその通りです。幼い子どもはまだ十分な知識を持っていないから何が正しくて何が間違っているのかが分からないのです。正しい判断ができないから、すぐにだまされてしまいます。

**(2) 子どもは教えられたり 訓練を受けることを好まない** : このような生まれつきの傾向があるのです。特に、子どもはじっくりと教えられることが好きではない。子どもは気が短いいつもせっかちに欲しがります。想像できますね。このことは皆さんそれぞれに振り返ってみてそうだったと思います。私自身もそうでした。子どもは地道に時間をかけて基本を学ぶことを苦手、もしくは、嫌いだったりします。なぜか？それが辛いことだと私たちは知ってるからです。だから、一つずつ段階を踏むことよりも、一気にゴールまで到達すること、一気に楽にゴールまで到達することを望むのです。

皆さんはそんなことがありませんでしたか？そのように望んでも基本をないがしろにしたままなら最後はどうなりますか？その過程においても結局は正しいゴールにたどり着けないわけです。ここで面白いのは、そんな時に私たちが「ほら、時間をかけて地道にやっていないからでしょ！」と言おうものなら反発して「いや、そんなことは初めから分かっていたよ」と言ったりするのです。子どもは忍耐を持って地道な訓練を受けることが苦手で、また、自分が間違っていると教えられることを非常に嫌うのです。たくさんあることをまだ知らないのに、それでいて自分の考えが正しい、自分はすべて分かっていると思っているから、すぐにだまされてしまうのです。**(3) 見世物を喜ぶ** : それは危険であり教えの風に吹き回され過ぎることを起こしやすい感性である。子どもは本能的に見世物を好む。しかも仕掛けが大掛かりであればあるほど喜ぶ。子どもには識別力がなく事柄を判断する術がないと、このように言います。これもその通りですね。子どもはいろいろな派手なもの、目新しいものを好みます。おとなが見て「どうしてこれが面白いの？どうしてこれがそんなに楽しいの？」というようなものが子どもには楽しかったりするのです。そして、私たちが「なぜ？どこがそれほど楽しいの？」と聞くと、その内容ではなくただキラキラ輝いているから…と言ったりします。子どもは識別力がないからいろいろなものにだまされてしまうのです。

皆さん、幼い子どもはこのような振る舞いをするということです。これは子どもたちのかわいい部分かもしれませんが、同時に、彼らが抱えている弱さでもあるということです。この姿を私たちが覚えるときに問題となるのは、クリスチャンの中にいつまで経っても成長しない、いつまで経ってもだまされ易い子どもの性質を持っている者がいるということです。そんな未熟な者がいるということです。皆さん、どうでしょう？学んだみことばによって、また、みことばの知恵によって、物事を正しく判断することができる者に私たち変えられ続けているのでしょうか？そのことにおいて成長し続けているでしょう

か？それともこの世の考えやアドバイスなどに心を奪われたり、いろいろな間違っただけの教えに振り回されたりしていませんか？また、みことばによって教えられていくことや訓練されていくことを自分の喜びとしているのでしょうか？それとも、自分はもう全部知ってるかのように、自分が持っている考えこそが正しいとして教えられることを拒んだりしていませんか？

皆さんの周りの人があなたのことを思い浮かべるときに、この人は教えを受け易い人、教え易い人だと見るのでしょうか？それとも、この人は何を言ってもまず反発する、何も聞こうとしないとそんな姿でしょうか？特に、私たちがみことばに基づいて間違いや過ちというものを指摘されたときに、その指摘を、そのことばを素直に受け入れるのでしょうか？それとも反発して聞き流してしまうのでしょうか？子どもは見て来たようにこのようなことをするわけです。もし、私たちがいつまでも子どものままでいるなら、教えの風に吹き回されてしまいます。そして、それは結局のところ教会が成長していく上で大きな問題となるということです。だからこそ、パウロは私たちがいつまでも子どものままでいてはいけません。少しずつでも成長していくこと、それが絶対に欠かせないとそのことを求めていたのです。

そして最後に、この14節で皆さんに覚えて帰ってほしいことがあります。それはこのような教えの風がどれほど危険なものかということです。幼い子どもたち、未熟な者たちをだまそうとする悪い教えがいったいどれほど危険なものなのか、パウロはそのことに対してここで詳しい説明をさらに加えるのです。14節「…人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり」とここにパウロは三つのことばを使っています。

### ○教えの風の危険性

1) 人の悪巧み : 「悪巧み」と訳されているこのことばは聖書の中にここにしか使われていないのですが、これは「サイコロを用いた遊び」という意味を持っています。これはあの「すごろく」などというのではなく、サイコロを用いて行われる人をだますような遊び、不正が為されるような賭け事のことを指しているのです。そのような場でサイコロを転がす人はよく注意して見ていなければ自分が勝利するためにバレないようにイカサマをして、自分の思い通りの数字を出そうとします。要するに、悪巧みをするような人物というのは、どうすれば人をだますことができるのかをよく知っていて、自分の利益を得るためであれば、バレないように相手を惑わしてだまそうとするということです。だからこそ、私たちが注意していなければ、いつの間にか間違っただけの方向へと引っ張られてしまうことがあるということです。

2) 人を欺く : また次は「人を欺く」ということばです。このことばは「イカサマ、ずる賢さ」という意味を持っています。人を欺いて利益を得ようとする人はあらゆる手段を用いて相手を誤りの道へ引き込もうとします。そして、その手段というものは非常にずる賢く、巧妙だということです。だから面白いのは、このことばはエバをだましたあのサタンの様子を表わすのに使われていました。まさに、その姿だったのです。Ⅱコリント11:3に「しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています。」と書かれています。サタンはどのようにしてエバをだましていたのでしょうか？サタンは非常に狡猾でした。いきなり実を食べるようには言いませんでした。そうではなく、先ず、エバが神のことばに対して疑いを抱くようにと仕向け、そして、あたかも神に従うことよりも自分の思いや願いに従って生きていくことの方が、神に従うことに優る喜びをもたらすとそのように思い込ませたのです。ですから、このような者たち、人をだます者たちが持っている手段というのは、非常に悪賢く巧妙なものだということです。

3) 悪賢い策略 : これは人々を欺いて惑わそうとする人たちのその策略や手段というものが、悪意に満ちたものであるということ、その計画が余りにも狡猾で綿密に計画されたものであるということです。人をだます人たち、だまそうとする間違っただけの教えというものは綿密に計画されてやって来るということです。だからこそ、正しい判断力のない霊的に未熟な人たちは、そのようなものにすぐだまされてしまいます。私たちが覚えておかなければいけないことは、このような間違っただけの教えというものは非常に綿密に計画されているからこそ、一見すると本当かどうか分からないということです。偽教師たち



は「私は間違った教えを伝えに来ました」などとは絶対に言いません。彼らは「これが正しいことです」と言うのです。そして、正しい判断力がなければ、その人たちの話を聞いていつの間にか私たちはそのような間違った教えによって正しい道から外れてしまうことがあるのです。いつの間にか私たちの間にそのような偽の教えが入り込んでしまって、いつの間にか正しいみことばの教えから私たちを間違った方向へと引っ張っていく。そして、それらすべてが事前に計画されている綿密なもの、狡猾なものです。だからこそ皆さん、聖書はそのような危険に対してそのような間違った偽の教えに対して、偽教師たちに対して、繰り返してそれらが危険だということを教えたのです。

パウロがエペソ教会の長老たちに告げた警告にもそのことが言われています。使徒の働き 20 : 29 - 30 「:29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。:30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。」と。約3年もの間、パウロ自身は夜も昼も涙をもって教会のひとり一人を訓戒し続けて来ました。でも、そんな教会でもパウロが去った後に教会の外から凶暴な狼たちが入り込んで来て群れを荒らすだけではなく、「あなたがた自身の中からも、」と教会の中からも間違った教えを語る人たちが現れるようになるというのです。分かっていたらその人たちを教会から出しますね。分からないからその人たちに引き込まれるのです。それほど危険なものだということです。

また、ローマ書 16 : 17 - 18 にもこのように記されています。「:17 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまづきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。:18 そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」と。こうして、私たちを欺きだますような人たちは非常に悪賢くずる賢く悪意に満ちた策略を持っているということです。そして、そんな偽りは私たちの周りにたくさん溢れています。それらがいつも私たちが聖書が教えている真理から、キリストが教えている福音から私たちを遠ざけようとしているのです。

でも皆さん、どうしてこんな働きが私たちの周りに溢れているか分かりますか？いったいなぜ、このような教えの働き、教えの風はこのパウロの時代からいつの時代にも変わらずにあるのでしょうか？それはそのようなすべての偽りや間違った教えの背景には必ずサタンがいるからです。未熟な者たちをだまそうとするような悪い教えはいつもサタンから出て来るものです。サタンはあらゆる手段を用いて人々が真理を悟らないように、正しい道から離れていくようにと働いたり、救われた者たちから救いを奪い取ることはできませんが、間違った教えによって混乱させて、人々を落ち込ませたり教会が一致しないように常に働いているのです。サタンはこのことをずっとやっているのです。

そのように綿密な計画を立てて私たちひとり一人をだまそうとしているのです。いつもその手段は狡猾で悪賢いものでした。そして、パウロはサタンに対してこのように言っています。Ⅱコリント 11 : 14 「しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。」と。私たちをだまそうとするサタンの姿はまるで光の御使いのように、真理を語る者であるかのように変装して私たちのうちに紛れ込むのです。そして、このサタンは私たちひとり一人のどの部分に弱さがあるのかもよく知っています。そんなものが綿密な計画を立ててやって来るのです。様々な手段を使って神を見上げている私たちのその心を別のものに向けようとして引っ張ろうとするのです。

皆さん、こんな欺きや惑わし、サタンのこの策略に対して私たちはどのようにして立ち向かうことができるのでしょうか？どうしたらいいと思いますか？それはキリストが教会に与えた霊的リーダーたちからみことばを学んでそれによって成長し続けることです。私たちはいつまで経っても不安定でだまされ易いそんな子どものままでいてはいけません。いつまでも子どものようにだまされ惑わされるのではなくて、究極的な目標を目指している者として成熟したおとなになっていかなければいけないのです。いつまでもだまされる者であってははいけません。みことばをしっかりと知って、それによって正しい判断を築いていきなさいとパウロは教えます。

**まとめ** : 皆さん、これが目標を目指して教会が成長していく上で私たちが注意すべき一つの点でした。あとの四つはまた来週再来週に学びます。でも皆さん、振り返って14節を見たときに、私た



ちはキリストが持つておられるその教会の完成図へと近づいていくために、私たちが具体的に何をするべきなのか、そのことを学びました。どうだったでしょう？救われ新しく霊的な赤ちゃんとして生まれた者たち、その私たちの責任はいつまでもその状態に留まっているのではなく、信仰において益々成長していくことでした。確かに、まだ何も知らない霊的に幼い幼児のときには、いろいろなものに振り回されて心が揺らいでしまったこと、間違った教えに引っ張られたこともあったでしょう。でも、そんな者たちも、少しずつみことばを通して神が私たちのうちに働いてくださることによって成長して信仰のおとなへと変えられていくのです。いつまでも子どものままでいることはサタンの策略に自分の身をさらしているということです。

ですから、私たちはいつもみことばを学んで、そこに立って歩いていくことです。すべての救われたクリスチャンたちは赤ちゃんとして新しい歩みを始め、そして、必ずおとなの姿へと変えられていきます。だからもし、まだこの中にイエス・キリストにある救いを知らない方がおられるなら、また、こうして今まで見て来た中で自分の歩みを振り返ってみて、そこに一切の成長が見られない方がいるとするなら、そのどちらにも言えることは、今日このイエス・キリストを自分の本当の救い主として信じ受け入れることです。主が十字架の上で成し遂げてくださったその救いのわざを知って、そして、この主の前に出てこれまでの自分の罪を悔い改めて、この方を自分の主救い主として生きるその新しい歩みを始めてください。これが一人ひとりにとっての永遠に関わる大切なことです。

そして、この主のために生きておられる皆さん、キリストに似た者へと少しずつ成長しようとされている皆さん、そのように続けて歩いていってください。覚えておかなければいけないことは、そこには必ず、忍耐が必要になるということです。自分自身の成長に対してもそうですし、また、周りの兄弟姉妹たちに対してもそうです。自分が成長していくことに対して忍耐を持っていなければ諦めてしまうこともあるし、他の兄弟姉妹たちに対して忍耐を持っていなければ、どうしてこの人は全然成長しないんだろう？と、自分の勝手な思いをぶつけてそれによってイライラしてしまうことがあります。

覚えることです。私たちはみな子どもからおとなへと成熟している者です。同じ目標を持って今を歩んでいます。それなら、この目標に到達することができるようにと続けてみことばを学び、互いに助け合いながらひとり一人が成長し、そして、主に喜ばれる教会を建て上げていくことです。ぜひ、その目標を目指してともに歩いていきましょう。